

中世

第6章 中世社会の展開 3. 東アジア世界との交流 (1) 勘合貿易と倭寇

解説

国際港だった赤崎・大塚

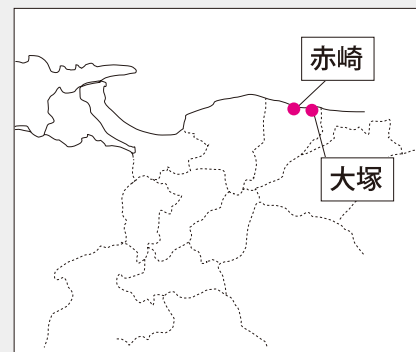


『籌海図編 1』(国立公文書館デジタルアーカイブ)

16世紀の中国の地図にみる鳥取県

これは1561年に明の鄭若曾が作成した『籌海図編』と呼ばれる日本地図の一部である。ここには日本の旧国名とともに、沿岸部の地名が記されている。鳥取県域をみると、伯耆国の中に「阿家殺記」「倭子塚」「他奴賀和」の3ヶ所の地名が見られる。これを当時の地名に直すと以下ようになる。

- ・「阿家殺記」…赤崎(琴浦町赤碕)
- ・「倭子塚」…大塚(琴浦町逢東)
- ・「他奴賀和」…不明(倉吉市田内?)



国際港だった赤崎と大塚

この地図からは以下のような特徴を読み取ることができる。

- ① 港や島の地名が詳細に記されており、これらが明の人々にとって重要であったことを示している。その背景には東アジアの沿岸地域を結ぶ経済・交流圏があったと考えられる。
- ② 地名の記載は、山陰では伯耆国以西、山陽では備前国以西に限られており、これらの地域が東アジアの経済圏に組み込まれていたことを示している。伯耆国もその中に含まれていたことがわかる。
- ③ 伯耆国内では「赤崎」や「大塚」が明の人々からみて重要な港として認識されていたことがわかる。

このように、16世紀においては伯耆国も東アジア経済圏に組み込まれていた。中世の赤崎や大塚はいわば国際港であり、これらの港を拠点として、伯耆国も国際社会とつながっていたと考えられる。

(担当：岡村吉彦)

Q：考えてみよう！
中国が作成したこの日本地図から、どのようなことが読み取れるでしょう？

- 参考資料
- ・長谷川博史「日本地図からみた16世紀の『中国地域』」(『中国地域と対外関係』)
 - ・鳥取県『新鳥取県史資料編 古代中世2 古記録編』(2017年)